



暮らすほどに「違い」の幅が狭くなってきました。

熊本女子大学内にある外国語教育センター（熊本市健康町）は設立して三年。外国人教師四人と国際交流員二人が学生や社会人の外国語学習の指導に当たっています。今回は、在熊六年のダニエル・T・カークさん（アメリカ出身）に熊本の印象を聞きます。

ダニエル・T・カークさん

●プロフィール

1960年生まれ。ウエストバージニア大学大学院修了後来日。1991年から熊本女子大学の外国語教育センターに勤務。趣味の合気道は2段、空手は初段の腕前。結実夫人との間に今年2才になる洋君がいる。



●幸せも悲しみも、人間皆同じ
大学では英語教育法を専攻しましたが、日本語に興味を持ち、一年間勉強した後、来日しました。初めて熊本を訪れた時、緑が多くてきれいな町だと思いました。九州の真ん中で、海も山も近いのいいですね。休日は家族と小旅行を楽しんでいます。
刺身を食えることのできない外国人を時々見かけますが、残念です。この国の人がやっていることと同じことをすればもっと近づけるのに。ピクピク動いているイカ刺を食った時のこと。恐る恐るはしをもっていったら、は



「僕は英語、妻は日本語で話します。お互いの文化を尊重しています。」とカークさん。洋君はもろろんバイリンガル？

しがイカにつかまっていた。仕方なく食べた。とてもおいしかったです。日本に来た頃は、漢字だけの看板音匂い、すべてが母国アメリカと違っていました。でも暮らすほどに「違い」の幅が狭くなってきています。結婚すればうれしい。子どもが生まれればうれしい。幸せも悲しみも人間感じること皆同じです。

●武道に見つけた日本の心

日本に来てから、日本の文化も知りたいと思いきや習い始めました。今は合気道を習っています。空手や合気道から学んだことは我慢すること。例えば「蹴り」。これがベストとせず、よ

リペターを求める。どんなに偉い先生でも初級者と同じように「蹴り」の練習を欠かさない。それにとっても気が長い。このような気質は日本人の仕事ぶりによく表れていますね。武道は日本への興味を二層広げてくれました。

●アメリカは

ぜいたくだと思う

里帰りするたびに「アメリカはぜいたくだなあ」と思うようになり

ましたね。母は乾燥地域に住んでいるのに洗濯の際、乾燥機を使うんです。空調もアメリカの家は全館暖房だけど、日本は使う部屋だけ。地球の人が皆アメリカ人みたいな生活をしていたらたまらないですね。もっと日本人の生活を見習わなければと思っています。冬、トイレに立つのは辛いけど（笑）。



週に一回、女子大生にも教えています

県立美術館収蔵品から「乾漆盛器（日の丸）」増村益城作 高さ七・五糎 径三八・〇糎×三八・〇糎



増村益城展のとき、ある新聞記者にプラスチックとどこが違うのかと聞かれた。深みのある微妙な色調や形態のまろやかさなどは、雑な見方をすれば見逃されるかもしれない。ただ生活感の稀薄そうな若い記者に説明するのは意外に難しかった。

工芸はまず生活の中で使うことを目的に始まった。やがて使用する材料の特質やデザインを生かすために、技術的にも芸術性でもほとんど高度にエスカレートしていく。作品の完成度が高くなればなるほど、使う人間には手が届かなくなるようだ。現代工芸はいま矛盾の中にある。

益城作品には気取ったところがない。益城町の農家出身であるこの作家の作品は、あくまで簡潔で暖かく、しかも深みがある。人間国宝になっても、「漆は使ってこそ善さが出ますから、どんどん使って下さい」と作家自身が言う。

そうはいいながらも、漆黒をバックに浮かびあがる日輪を思わせる朱の円は、神々しいまでに象徴的で、やはり使うにはちょっと恐れ多い。（熊本県立美術館 参事 高浜州賀子）